第5回東アジア日本研究者協議会国際学術大会

日本古典文学の想像力
パネル発表要旨集

パネル主管：漢陽大学 日本学国際比較研究所

2021年 11月 27日(土)

主催 東アジア日本研究者協議会・
高麗大学校グローバル日本研究院・
高麗大学校4段階BK21・
中日語文学教育研究団

日 程

14:00–16:00

日本古典文学の想像力（1）

司　会：李康民（漢陽大学）

発表1：木場貴俊（京都先端科学大学）
「江戸怪談における普遍と特殊」
討論1：X. Jie Yang（University of Calgary）

発表2：金小英（釜山大学）
「紫式部の想像力、「源氏物語」の構想力」
討論2：趙恩馝（崇実大学）

16:30–18:00

日本古典文学の想像力（2）

司　会：権桃楹（漢陽大学日本学国際比較研究所）

発表1：岳遠坤（北京大学）
「秋成文学における宮木像の系譜（仮題）
討論1：梁誠允（高麗大）

発表2：韓京子（青山学院大学）
「浦島伝説の近世的変容：「日本意識」のあらわれ」
討論2：李市俊（崇実大学）

目　次

日本古典文学の想像力（1）

- 江戸怪談の普遍と特殊
  …… 木場 貴俊(京都先端科学大学)　1

- 紫式部の想像力，『源氏物語』の構想力
  …… 金小英(釜山大学)　4

日本古典文学の想像力（2）

- 上田秋成文学における宮木像の系譜――その想像力の源となるものは
  …… 岳遠坤(北京大学)　15

- 浦島伝説の近世的変容－「日本意識」のあらわれ
  ……韓京子(青山学院大学文学部)　21

江戸怪談の普遍と特殊

木場 貴俊(京都先端科学大学)

本報告では、江戸時代の怪談（江戸怪談）を「普遍」と「特殊」という切り口から考えてみるものである。

改めて、怪談の意味を『日本国語大辞典』（第二版）で確認してみると、「不思議な話。あやしい話。気味が悪く、恐ろしい話。特に、化け物、幽霊などの話」とある。また、「あやしい」とは、「正体のはっきりわからない物事、普通でない物事に対して持つ奇異な感じをいう」。

江戸時代の怪談の内容については、高田衛による三分類―①唱導仏教系怪談②中国小説系怪談③民俗系怪談に分類（高田衛「解説」『江戸怪談集』中、岩波書店、1989）―や、木越治が指摘する特色―仏教系怪異譚の民間伝承への流入、中国小説の影響、地域限定型怪談、民俗系怪談の編集・刊行、百物語怪談集、弁惑物（木越治「怪異と伝奇」Ⅰ、揖斐高・鈴木健一編『日本の古典―江戸文学編』放送大学教育振興会、2006）―が、大いに参考となる。

そうして江戸怪談をいろいろ読んでみると、類似しているものが散見される。類似している部分は、怪異の内容や話の展開（話型）など、さまざまである。こうした類似性は、「普遍」性という表現に置き換えることも可能だろう。江戸怪談の類似性＝普遍性に注目した仕事としては、柴田宵曲が編んだテーマ別に怪談を紹介するアンソロジー『妖異博物館』『続妖異博物館』が注目される（いずれも青蛙房より1963年刊行）。また、特定の怪談を対象とした研究で、類似した事例を列挙しているものは枚挙に暇がない。

しかし一方で、怪談ほど「普遍」であることにふさわしくない文芸はないともいえる。怪談には「あやしさ」、つまり「普段ではない」ことが常に求められている。複数の怪談間で類似性＝普遍性が見られれば見られるほど、怪談は定式化している。定式化した怪談は、「よく知られた」「当たり前」のもの、つまり「普段からある」ものであり、「あやしい」話＝怪談とはいえない。普遍性が多く見られる怪談は、怪談として成立していないのである。

すなわち、怪談として成立させるための必要な要素は、類似していない部分＝「特殊」性にあるといってよい。特殊性を別の言葉で言い換えるならば、新奇性である。怪談には、知らない怪異、予想していない展開など、常に新奇性が必要なのである。

以上の点を踏まえながら、江戸怪談の普遍性と特殊性を考察していく。

なお、文芸ではなく、記録類に記された怪異を見てみると、時代を経るなかで、寺社といった場所などによって起きることとその対処法が定まっていく。つまり、怪異の定式化が現実では行われていく。こうした記録上に残る（実際に起きたとされる）怪異と文芸として書きとめられた怪異の比較も、上述の問題意識とともに検討を行っていく。

最後に、現在日本のエンタテインメントとなっている「実話怪談」との比較も行う。実話怪談とは、創作ではないことを建前にした怪談、つまり、体験者（体験した本人、あるいは友人、親類、同僚など）への取材＝話の出所がはっきりしていることを前提にした怪談である。厳密には、情報提供者からの話を作者（体験者の場合もある）が文芸としてリライトしたものである。その大きな特徴は、怪異を起きたままに記す、つまり、怪異への解釈を行うことがほぼない点にある。そして、起きた怪異には類似しないものが求められている。こうした現代の実話怪談と江戸怪談の比較をすることで、江戸怪談の輪郭をより鮮明に見いだすことができるのではないかと考えている。

具体的な内容については、江戸怪談の普遍性と特殊性については、江戸時代より前の古典を典拠とした江戸怪談や中国怪談の翻案などから検討する。記録の怪異と文芸の怪異の比較は、鳴動や動物が人の言葉を話す怪異を素材にして検討する。そして、実話怪談と江戸怪談については、実話怪談の特徴を整理し、その特徴が江戸怪談に見られるかどうか、見られるのであればそれはどのように表現されているのかを、現代と比較しながら検討していくこととする。

紫式部の想像力、『源氏物語』の構想力

金 小 英 (釜山大学)

日本を代表する長編物語であるが『源氏物語』(以下『源氏』)が「日本(古典)文学の傑作」という位相を持つまでどんな過程があっただろうか。まずは、男性の学問の対象になり、長い注釈史の伝統が作られたことがあげられよう。次に、近代国家体制の構築の中で自国文学史＝日本文学史の形成が重要に台頭され、その過程からの再発見、また、1925 年以来、イギリス文学界の好みに合わせたアーサー・ウェイリー（Arthur Waley）の完訳本(1925-1933)の出現とウェイリー訳に対する西欧の驚嘆、それに連動して日本国内に起こった源氏ブームなどがあいまって最高の古典として動かぬ地位を固めてきた。

それまで『源氏』を小説へ進化する前段階の文学形態に見ようとする観点が長くあったが、今にいたっては西欧中心主義から脱皮し、歴史上、最も古い小説の形態に高評する批判的な視点も併存している。『源氏』を小説に見るべきかどうかの判断基準の一つに、文学作品としての完結性を持っているかどうか、つまり構成力の問題が絡んでいると思われる。『源氏』の文学的欠陥として、大長編でありながら構造的統一性を持たず、巻々が断片化されているとか、人物造形において一貫性がないという指摘がなされてきたが、これらは西欧から近代的文学の概念を受容する過程中で発見されたと考えられる。

本発表で注目するのは、長編としての『源氏』のそういった側面、いわゆる構想力の問題である。とりわけ、男主人公・光源氏とその対蹠点にある

頭中将の人物造形に焦点をあて、一貫性の面から考察しようとする。その際、「雨夜の品定め」と「絵合わせ」を照らし合わせて分析することとなろう。

『源氏物語』において人物論が可能になるのは、「澪標の巻あたり」[1)]からだという。筋や事件中心の文脈が、この巻を境に作中人物の内面の方にも向けられるからである。澪標巻の大きな特徴といえば、光源氏の復帰と冷泉帝即位という、政治状況の変化である。それに伴い、「作中人物の言動のあり方」も「飛躍し、それまでの姿とはつながりにくいような傾向を見せる」[2)]といわれるほど、以前の巻とは違う人物像が語られるようになる。

そうした作中人物のあり方の、もっとも顕著な 1 例としてよく取りあげられるのが頭中将である。須磨巻まで源氏の親友であったはずの人物が、絵合巻で一変し敵役にまわるとみなされてきたからである。しかしながら、果たしてそのように「一変」すると理解するのが妥当であろうか。問題は、頭中将が事実上はじめて登場する「雨夜の品定め」の読み方にあるのではないか。というのは「雨夜の品定め」で、中の品の女論に織りこまれていた、源氏と頭中将の女をめぐる観点の違い、それに物事に対する姿勢の差が、遠く後の「絵合」で前面に浮上し表面化されると思われるからである。個人的あるいは私的な 2 人の女性観・倫理観というべきものが後の政権争いにかかわり物質的な力、政治的な力へと変換すること、さらに娘の教育観にも及ぶところからは、物語構想における綿密な意図を読みとることができるのである。

---

1) 増田繁夫「源氏物語作中人物論」『国文学　解釈と鑑賞』449、1971, p.120.

2) 増田繁夫(1971,p.123)。

「雨夜の品定め」の女論:頭中将と源氏の観点から

「雨夜の品定め」は物忌みで宮中にこもっている源氏のところへ頭中将が訪ねる場面から始まる。そこに左馬頭、藤式部丞が加わり中の品をめぐる女性論へと展開するが、そこでの源氏と頭中将の姿はかなり対比的である。

【関連本文A】(―は源氏に、…は頭中将にかかわる文)

①〔頭中将が〕(a)「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。… まことにその方をとり出でむ選びにかならず漏るまじきはいとかたしや。…」とうめきたる気色も恥づかしげなれば、〔源氏は〕(b)いとなべてはあらねど、我も思しあはすることやあらむ、うちほほ笑みて、「その片かどもなき人はあらむや」とのたまへば、「いとさばかりならむあたりには、誰かはすかされ寄りはべらむ。…(c)中の品になむ、人の心々おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき。…」とて、いとくまなげなる気色なるも、ゆかしくて、〔源氏は〕「その品々やいかに。いづれを三つの品におきてか分くべき。…」と問ひたまふほどに、左馬頭、藤式部丞御物忌に籠らむとて参れり。…〔頭中将が〕「…(d)受領といひて、他の国の事にかかづらひ営みて品定まりたる中にも、また、きざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなど、はた、なかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕に出で立ちて、思ひがけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、〔源氏は〕(e)「すべてにぎははしきによるべきななり」とて、笑ひたまふを、(f)「別人の言はむやうに心得ず仰せらる」と中将憎む。(帚木 56～60)

②〔左馬頭が〕「…　すぐれて瑕なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて棄てがたきものをは」とて式部を見やれば　…　いでや(g)上の品と思ふにだにかたげなる世を、と〔源氏の〕君は思すべし。(帚木 61)

③〔頭中将が〕「…世の中や、ただ、かくこそとりどりに比べ苦しかるべき。(h)このさまざまのよきかぎりをとり具し、難ずべきくさはひまぜぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法気づき霊しからむこそ、また、わびしかりぬべけれ」とて、(i)みな笑ひぬ。(帚木　84)

④〔左馬頭が女性論をまとめあげると〕君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。(j)これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきにも、いとど胸ふたがる。(帚木　90～91)

これらを見ると、2 人の間にはある判断をする際の物事との距離のとり方、さらにはあるべき女像をめぐる観点の違いと言うべきものが察せられる。

まず、距離感覚の面からは、本文①で、自分の経験に基づき完璧な女はいないと確信する頭中将の態度(a)に対し、源氏は必ずしもそれに賛同するわけでもないが、(b)で余裕を持った笑みを浮かべながら、判断を留保した形で頭中将に向き合う。頭中将の、確信に満ちた「いとくまなげなる気色」は中の品の女礼賛論〔(c)(d)〕でもかなり力を入れた形で主張されるが、源氏が(e)で笑いながら軽く突っ込むと(f)で「憎む」、その姿は力を入れた分、切れやすい面を見せる。

自分の考えを未熟な形のままでは表さずに、ほほ笑みながら頭中将より話を聞きだす源氏の態度からは、状況に対する感情統制能力の高さが看取される一方、何でも知りつくしたように語りながらささやかな突っ込みにすぐ感情を露出する頭中将のようすからは、適切な判断を要する際の、状況を見極めるバランス感覚を見失いやすい人柄が浮かび上がってこよう。

理想の女、あるべき女像をめぐる観点の違いも 2 人の関係の中からより具体性を帯びて浮き彫りになる。本文①と③④に注目したい。

本文①の(a)(c)(d)と本文③の(h)の頭中将の発言からは、「理想の女の不在」またはそうした女性を必要としないという見解が見られる。すばらしい女がいると噂を聞いて行ってみても非の打ち所のない人はいないと慨嘆しながらも〔(a)〕、それが何の欠点もない、完全無欠な女をもとめる願望につながることはなく、むしろ(h)では「吉祥天女」のような完璧な女を妻に望めばそれこそ仏くさく人間離れして興ざめだ、と笑い落とすのである。

頭中将にとって、あるべき女像は本文①の(c)(d)から推測できる。中の品の女を評価する文脈であるが、(c)ではそれぞれの気質やめいめいの考え、好みのはっきりした点に注目している。ほかと区別できる「おもむき」に美点をおいているわけで、諸注釈などが指摘するように「個性」とも言うべきものであろう。また(d)では、いい加減な上達部より非参議の四位などが、十分な財力をもってまぶしいほど成長させた娘のなかに、入内して帝の寵愛を受けることも多いと評価している。(c)と(d)を合わせて読むと、財力のある中流の家で教育された中の品の女性こそ、それぞれの個性がはっきりしていて面白みがあるという、礼賛の文脈が見えてこよう。

しかし、これに反応する源氏から見れば話はまた違う。理想の女はいないのだと慨嘆する中将の言葉に、(b)の「いとなべてはあらねど」と思うところや、(g)「上の品と思ふにだにかたげなる世を」と思う、その心中からは、めったにいないとはいっても、理想的な女に実際に会った経験が匂わされている。頭中将によって笑い落された「吉祥天女」は、源氏においては最高の女性としてあこがれ続けた藤壺を連想させたのではなかろうか。それは、源氏への敬語表現が脱落されている(i)「みな笑ひぬ」と、左馬頭の女性論が終わる箇所の本文④で「完全な理想形の結像」[3]として源氏の心

中に藤壺が想起されるところからも裏付けることができる。

以上のように、「雨夜の品定め」の叙述から、2 者の異なる女性観、かつそれに投影されている理想の差をも読みとることができる。つまり、世俗的な繁栄と公的な承認を重視する頭中将の発言からは現実主義的な面が如実に示されたのに対して、吉祥天女のような理想の女・藤壺をもとめる源氏の姿勢には、完全なもの、理想的なものへと上昇しようとする人間精神の基本的な欲求がかいま見られるのである。お互いの軽いひやかしとおかしみの中で露見された 2 人の異なる志向性は、遠く絵合巻の、遊戯の場で具体的かつ対立的に検証されることとなろう。

「絵合」の物語絵論:政治的な世界への変換

絵合巻は、源氏が養女・前斎宮を冷泉帝に入内させることから始まる。澪標巻ですでに娘(弘徽殿女御)を入内させていた権中納言(かつての頭中将)にとって、前斎宮の入内は不安を抱かせる事態であった。それまでよき友であり、競争者であった 2 人の関係にひびが入るのもこの巻からである。したがって頭中将の人物描写も「変貌」と言われるほど一変し、「不統一な点さえ見える」[4]ようになる。関連本文を確認すると以下のとおりである。

【関連本文B】(―は源氏に、…は頭中将にかかわる文)

⑤(ア)物語絵はこまやかになつかしさまさるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、(イ)弘徽殿は、そのころ世にめづらしくをかしきかぎりを選り描かせたまへれば、うち見る目のいまめかしき華やかさは、いとこよなくまされり。(絵合　379)

3) 村井利彦「帚木三帖仮象論」『源氏物語IV』有精堂、1982, p.77.

4) 松尾聡「頭中将」『源氏物語講座3』有精堂、1971, p.357.

⑥まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせて争ふ。〔左方〕「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなけれど、(ウ)かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。(エ)右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。…「(オ)俊蔭は … 心ざしもかなひて、つひに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを弘め、名を残しける古き心をいふに、絵のさまも唐土と日本とをとり並べて、おもしろきことどもなほ並びなし」と言ふ。…

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。(カ)これも右はおもしろくにぎははしく、内裏わたりよりうちはじめ近き世のありさまを描きたるは、をかしう見どころまさる。〔左方の〕平内侍、

(キ)「伊勢の海のふかき心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき世の常のあだごとのひきつくろひ飾れるにおされて、業平が名をや朽すべき」と争ひかねたり。右の典侍、

(ク)雲のうへに思ひのぼれる心には千ひろの底もはるかにぞ見る（絵合380～382）

たしかに以前の好意的な語り口とは違い、源氏に負けまいとする「いどみ」心は、語り手によって否定的にとらえられ、源氏からも嘲笑される。

鈴木日出男は、頭中将の人物像が大きな変化を呈してくるのは、何よりも光源氏の人生ともっとも緊密にかかわりながら造型されているからであり、その変化は「旧左大臣家の長男として、藤氏の権門の家系を維持する立場からの必然的な経過」[5)]であるとし、源氏対藤氏という政治的な理由によるものととらえた。これは頭中将の人物像を説く多くの論が最終的にたどりつく結論でもある。娘の入内・立后が権門の家系を維持・拡大する手段であって、次代への政権獲得の布石にもなる当時の現実から

5) 鈴木日出男「内大臣(頭中将)論」『講座源氏物語の世界5』有斐閣、1981, p.200.

察すれば、源氏対藤氏という政治的図式から理解しようとするのはもっともであろう。

しかしながら、2 人の対立状況を生み出す、光源氏と頭中将それぞれのもっていた要因、かつ頭中将の性格上の否定的な面は、確認したとおりすでに「雨夜の品定め」の段階で示唆されていたのではないか。ただし、「雨夜の品定め」ではごく個人的・私的な領域を越えなかったが、政権の維持・継承にかかわる話にまで進んできた時点で、物質的・政治的な力を得るべきものはどちらなのかという主導権の問題に大きく転換し、それによる視点の変化が起こったと思われる。

2 人の、主導権をめぐる政権争いの媒介になるのは「物語絵」である。本文⑤と⑥で、源氏と権中納言はそれぞれが擁立する梅壺と弘徽殿の女御に絵を献上するが、それは 2 人のになう価値観、理想を反映する物的証拠でもある。

源氏は、(ア)のように「いにしへの物語、名高くゆゑある」『竹取物語』と『伊勢物語』を奉り、権中納言は、(イ)「そのころ世にめづらしくをかしきかぎり」ということで、『うつほ物語』と『正三位』を献上する。これらは藤壺中宮の前で、左右に分けられその価値が競い合わされる。女房たちの論評は源氏と権中納言を代弁するはずで、本文⑥の(ウ)のところで、左方＝源氏側は濁世に身を置きながらけがれず天上の世界に帰ったかぐや姫の、「精神の高潔」さ、「古代への回帰」(新全集の注)の理念に大きく共感している。これに対して右方＝権中納言側は地上主義というべき「宮廷讃仰、王威礼賛の精神」[6]から、(エ)と(オ)のところで『うつほ物語』をもって反駁する。かぐや姫の昇天した「雲居」は誰にもわかりがたい領域であるゆえいいようもないとし、そのころの道徳的社会的基準からかぐや姫の卑しい身分と后にならなかったことを欠点としてあげ、『うつほ物語』の俊蔭が

6) 清水好子「源氏物語「絵合」巻の考察」『文学』岩波書店、1961, p.43.

「ありがたき才」を外国と日本の朝廷に知らせたのを高く評価する。

絵合の 2 番として出されたのは左方の『伊勢物語』に、右方の『正三位』である。左方は、本文⑥の(キ)のように『伊勢物語』の「ふかき心」を賞賛したが、右方は余り身分の高くない「兵衛の大君」[7]が帝の寵愛を受け「正三位」に叙せられた、その「思ひのぼれる心」〔(ク)〕を褒めたたえた。すでに考察したように、「雨夜の品定め」の本文①で、家の十分な財力をかけて個性豊かに成長した、中の品の女が帝の寵愛を受けることを評価した〔(c)(d)〕、頭中将の言葉と連動していることがわかる。その時、源氏は(e)のように「すべてにぎははしきによるべき」なのかと冷やかしたが、まさに頭中将が認める『正三位』は(カ)「おもしろくにぎははしく、内裏わたり」などを描いたものであって、「雨夜の品定め」の時と同様の価値観が響いている。後に帝の御前で行われた絵合でも左方の古風な絵に対し、右方は「昔の跡に辱なくにぎははし」(絵合　386)きものであった。

1 番と 2 番の物語を比べてみると、『伊勢物語』の「ふかき心」は、かぐや姫の「思ひのぼれる」反世俗的な面と共鳴しながら、俊蔭物語の世俗的な「古き心」(ふかき心？)[8]と対立し、また『正三位』の「思ひのぼれる心」との質の違いを明らかにしている。「雨夜の品定め」で見え隠れしていた 2 者の理想主義の位相差を支え、方向づけながら、必然化する文脈であり、その意味で 2 つの場面は符合すると言えるだろう。「雨夜の品定め」で現れた世俗的な繁栄と公的な承認を重視した頭中将の主張は、内外の朝廷に

---

7) 兵衛府の官人の長女。新全集は「中流貴族以上はありえない」(p.383)と注記する。ちなみに、『正三位』は、女主人公が「当時女官としての高位であった正三位に陞叙された」(石川徹「物語文学の成立と展開」『講座日本文学3 中古編 I 』三省堂、1968, p.145)物語であると推測されている。

8) 新全集が底本としている大島本は「古き心」である。が、青表紙他本に「ふかき心」という異文も多く、新全集は「ふかき」のほうが通じやすいとしたが、その「ふかき心」という本文を認めて次に競いあう各々の物語を見ると、その違いはより顕著になり、左方と右方それぞれの価値判断の一貫した姿勢がうかがえる。

認められた俊蔭と、帝の寵愛を受けて中流の女性としてはありえないほど高い地位に上りつめた兵衛の大君の生き方とも交響しあいつつ、一方では、吉祥天女に託されていた、源氏の理想的なものに対する渇仰、またかぐや姫の高潔な精神、落ちぶれても輝く業平の自由な心とは緊張しあっているのである。

中宮と後の冷泉帝の前での、2 回にわたる絵合は源氏の勝利に終わる。源氏の引き立て役を負わされた頭中将に所詮勝つ見込みはなかったかもしれない。ただ、それを認めさせる方法として、物語における同意ないし合意を得る手続きとしての絵合という遊戯を導入したのは意味深い。冷泉帝を中心とした新しい政権が立ちあがった時点で、それを存続させ堅固にするには、政権担当者の権威や執行力だけでなく、後々まで語られる新たな道徳や理想、価値観が構築される必要があっただろうが、そこには人々が進んで悦服するほどの説得力がなくてはならなかっただろう。絵合における源氏の勝利は源氏側の道徳または理想といったものが、人々の同意を得て物質的力に転換する瞬間であったわけである。

「雨夜の品定め」のもつ寓意性は、このように頭中将をめぐる人物論的な理解を壊すことなく、むしろ絵合巻での政治闘争を見越したかのように機能しているといえるのではないか。

「雨夜の品定め」と「絵合わせ」における構造的統一性

このように「雨夜の品定め」の女性論は、源氏と頭中将の関係においても有効に働き、その寓意性は少なくとも第 1 部の長編的展開を読み解く上での重要な視座を提供する総序として機能していたと思われる。

「雨夜の品定め」に語られた源氏の志向性が、完全なものをもとめる人間精神の基本的な欲求を象徴するものであったとするならば、頭中将のそれは当代に通じる現実主義を代表するものであったといえよう。「絵合」

は、その位相の違いを「物語絵」をもって具体的に検証し競い合わせることで、個人的あるいは私的な価値というべきものを、物質的な力、政治的な力へと変換させ、主導権の問題に大きく置き換えたのである。2 人を親友として描きながらも、根本的な違いを女性論の行間にひそかに胚胎させ、物語の進行とともに膨らませ、絵合巻の政治的な物語の中で前面に浮上させたのである。

また上記のこととかかわって、頭中将の人物像についても、従来のように澪標巻以降(特に絵合巻)において必然的に変貌しているととらえるのではなく、「雨夜の品定め」での頭中将のありように照応していると解しうることが確認できただろう。すなわち、物事に対して余裕をもってのめりこみすぎることのない源氏の柔軟さと優雅さは、物事と距離を置かずのめりこみやすい頭中将の気質との対比の中で形成され、互いを照らし合わせる効果をなしていたが、そこでの語り手は頭中将に対して決して否定的というわけではなかった。しかし、末長く存続すべき権力をめぐる話になると、その性格の否定的な面が強調されるようになったのだと思われる。一方、頭中将としばしば対照される形で、源氏の卓越性はより顕著なものとなっているわけだが、源氏の場合も、「雨夜の品定め」以降におけるある種の一貫性を認めることができるのではないだろうか。ことほどさように、「雨夜の品定め」における 2 人のあり方は重要であった。

＊『源氏物語』の引用本文は小学館の新編日本古典文学全集(略称、新全集)による。

上田秋成文学における宮木像の系譜
――その想像力の源となるものは

岳 遠 坤（北京大学）

宮木という女性は、架空の人物であるけれども、秋成の心を強く打ったキャラクターの一つと考えられる。『雨月物語』と『春雨物語』に、宮木を主人公とする短編が各一つ収めている。「浅茅が宿」と「宮木が塚」である。「浅茅が宿」においては、夫の勝四郎は商売のために上京し、戦争に道を妨げられ約束通りに七年間も帰れず、宮木は夫の帰るのを待つ間に命が絶つ。「宮木が塚」は、遊女宮木と河守十太兵衛をめぐる悲恋の物語である。中に、藤大夫という人物がいて、宮木に横恋慕をし、罠をかけて十太兵衛をだまし殺してしまう。そのあと、宮木は、やむを得ず、藤大夫に身を委ねるが、ある日、十太兵衛の本当の死因を聞く。怒って、水に投身。物語の源流を探れば、『剪灯新話』に収める「愛卿伝」はその原典で、浅井了意によって作り変えられた「遊女宮木野」は仲介テクストであることは、周知の通りである。それ以外に、物語の類型から言えば、中国の白話小説『警世通言』の中の「杜十娘怒沉百宝箱」にも似ており、日本では、都賀庭鐘によって翻案され、「江口の游女薄情を恨みて珠玉を沉むる話」（古今奇談繁野話）となる。本論では、先行するテクスト「愛卿伝」や「遊女宮木野」と比較して、「杜十娘怒沉百宝箱」やその翻案である「江口遊女」など関連するテクストを参考にして、秋成における宮木像の特質とその想像力をなす古典の底流と刺激となる明末の主情文芸思潮や李卓吾の「童心説」を考察し、東アジやの視野において、秋成文学における情の発見およびその想像

力を刺激した諸要素を考えたい。

一. 秋成文学における宮木像の源・愛卿と宮木野

この部分では、まず「愛卿伝」と「遊女宮木野」のあらすじを紹介し、比較する。

「遊女宮木野」は「愛卿伝」と同じように、女性主人公の貞節を強調している。特に、婦徳や「道」などの言葉が、「愛卿伝」より一層際立つ。

「愛卿伝」の瞿佑が、元末明初に生きる漢民族の知識人で、浅井了意も戦国時代が終わったばかりの江戸初期に生まれる貴族僧侶であることから、同じ物語に同じ主題を寄寓している。つまり、遊女が良家となり、戦争にもたらされた社会の無秩序を嘆き、女性の道徳と貞節のイメージを通して、やがてくる平和社会と秩序の再建に希望を託していると考えられる。ただし、作者の立場の違いと、生きる時代(戦乱のただなかと平和時代の初頭の違い)から、前者は、主に女性の描写と通して、戦乱における男性知識人の変節を諷喩している。女性主人公の口を借りて、「蓋所以愧乎為人妻妾而棄主背夫, 受人爵祿而忘君負國者也」と風刺している。

しかし、浅井了意は、戦国時代が終わった近世初期に活躍した仮名草子の作者で、僧侶でもある。その身分と仮名草子の性質上、説教性が一層強くなるのが予想される。「女の道」、「孝行の道」など、「道」を厚く唱えている所に、その特色があり、民衆を教化する、説法するのは、仮名草子の目的である、作者浅井了意の念願でもあるといえよう。

二.「浅茅が宿」における情の発見と宮木の「をさなき心」(童心)

しかし、近世中期と末期に生きる秋成をめぐる時代と文化の状況がまっ

たく異なる。いろいろ問題を抱えるにもかかわらず、社会は安定している。国学では、儒教の道徳が問われるようになり、情欲を肯定する風潮の中で、秋成が、「浅茅が宿」を創作したのである。

前述する二つのテクストと比べて、「浅茅が宿」では、感情表現、特に宮木の心を描く表現が目立つ。以下、勝四郎が上京した後、宮木の心境を描く段落である。

> いづちへも遁れんものをとおもひしが、「この秋を待て」と聞えし夫の言を頼みつつも安からぬ心に日をかぞへて暮しける。秋にもなりしかど風の便りもあらねば、世とともに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづおれて、「身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮れぬと」かくよめれども、国あまた隔てぬれば、いひおくるべき伝もなし。

商売のために上京の決意をする夫に対して、前述する「女性主人公」とは異なり、功名や「孝行の道」を考えず、「行きなさい」と言わず、ただ不安と未練の言葉で夫を止めようとする。夫が離れた後、その「未練」がやがて不安となり、さらに約束どおりに帰らぬ夫に対する「恨み」となり、悲しみとなる。秋成の小説では、女性の心境を、そのまま、生き生きと描いている。

三、秋成における「をさなき心」と李卓吾の童心説

こんな宮木を、近くにすむ漆間翁が万葉時代の女性手児女と例え、評価する時に、「をさなき心」という表現を使っている。その「をさなき心」は、情のために水に投身する古代の手児女よりも優れていると。（手児女は、宮木を造形する時に、いわゆる想像力を与えた要素の一つであるが、紙幅のため、この要旨では省略する）

「をさなき心」とは何だろう。文字通り、幼い、稚拙、未熟などの意味があるが、当時では、否定的な意味として使われていない。むしろ、「赤子」など同じように、純粋や純朴といった、人間の本性を肯定する意味として使われている。『金砂』(万葉集研究書)においては、「をさなき」や「をさなき心」がしばしば使われている。例えば、次の例である。

> 今は見えず成には、ただただ思ひうらぶれて、あの山よ、横をればびけ、あなたの里の妹が家見んと、稚きなげきする也。思ひあまれば、何事もをさなき昔の心にかへりて、わりなきねがひをする也。其心のままを、いにしへ人は打出し也。
>
> 『金砂』

柿本人麻呂が妻との別れを惜しく、未練の気持ちを読んだ歌を評して言った段落である。この率直な心の発露を「をさなきなげき」という。そして、このような心から発し、何にも矯められていない自然の心を、「をさなき昔の心」だと指摘する。

この点においては、明末の文芸思潮の影響があり、李卓吾の「童心説」との関連が見られる。「赤子」にしても、李卓吾の「童心説」にしても、生まれたばかりの赤子の心、つまり、まだ道徳によって修飾されていない心こそ、「真心」であり、もっとも美しいものだという。

四、「宮木が塚」における宮木の童心と権力・知の悪

秋成の晩年でも、再び宮木という女性を主人公とする作品を書いた。本篇では、徹底的に童心を貫く女性像が書かれたといえよう。本論では、先述する諸テクストと比較して、身分の設定(家庭の不在)、女性主人公の純

粋さ、その自殺の原因について分析し、童心の反面である権力・知の悪を暴くのが、この小説の目的ではないかと考えられる。特に「愛卿伝」など道徳を強調するテクストはいうまでもなく、同じく翻案であり、明代の主情文芸思潮の影響下で創作され、特に女性の情に筆を入れている「江口の游女薄情を恨みて珠玉を沉むる話」とも趣をことにしている。具体的に言えば、「江口遊女」など関連する遊女の類型は、いずれも、主人公である遊女が、家庭（従良）つまり秩序に復帰する願望がつよく会われているのに対して、ここの宮木はその行動原理は、情だけに従っているとみられる。また、恋の破綻は、男の心変わりや、ほかのものによるのではなく、横恋慕者で藤大夫に代表される、権力に操られた知こそ、宮木の悲劇をもたらした原因だと考えられる。特に前者の知に関しては、秋成が批判してやまないことの一つでは、ここでは、秋成のほかの言説と明末文芸思潮における関連する言説を言及して論じたい。

まとめ

気持の発露を賞賛する秋成は、このような自然な気持ちを現れるのは、「をさなき心」であるというのは、李卓吾の「童心説」とその影響下にある国学の主張する同時代文芸思潮に、その源がある。秋成文学における「宮木」の継承は、先行するテクストと異なるのは、情を貫く所である。「浅茅が宿」にしても、「宮木が塚」にしても、ゆくすえ自殺する宮木は、道徳に殉ずるのではなくて、自分の情に殉ずる女性として描かれている。特に後者は、宮木と法然の説話を挿入して、真の信仰とは何かを問う趣旨もみられるのも大きな特徴である。これは、先行する「宮木像」と最も異なる所であるし、思想性も抜群であるのも言うまでもない。秋成は、道徳そのものを否定せず、外から強いられた道徳と欲望や権力に操られた道徳を否定し

ている。その代わり、彼が造形する「烈婦」は、斬新なものだと言えよう。

中国の伝奇は秋成に物語の枠を与える。日本の古典は、秋成に想像力を羽ばたかせる素材を与える。例えば、「浅茅が宿」や「宮木が塚」においては、万葉集の手児女伝説、法然と遊女の説話が巧みに織り込まれている。そして、文芸理念や思想から言えば、明末の主情文芸思潮と童心を肯定する風潮が、秋成の想像力を誕生させた重要な文化的土壌であり、その文芸創作に思想性と重みを与えたということは、従来やや見落とされていた点である。これを指摘して、本論を閉じたい。

浦島伝説の近世的変容—「日本意識」のあらわれ

韓 京 子 (青山学院大学文学部)

1. はじめに

江戸時代には浦島伝説を題材とした作品が数多く刊行される。江戸時代の作品における浦島伝説脚色の特徴としては、他の伝説を自由に組み合わせた手法が用いられていることをあげることができる。例えば草双紙には、浦島伝説に桃太郎・猿の生き肝・西王母・曽我物語・俵藤太・大職冠・人魚などを結びつけた作品が多数存在する。

浄瑠璃では、近松門左衛門が浦島伝説を題材として作劇した『松風村雨束帯鑑』(一七〇七年頃初演)と『浦島年代記』(一七二二年初演)の二つの作品がある。筆者はかつて両作品ともに浦島太郎の故郷を「日本」と称していることに着目し、考察を行った[1]。その中で、近松の作品における浦島太郎は、皇位継承をめぐる対立の解決に関わる活躍をし、いずれの作品も日本を意識したつくりになっていることを指摘した。『松風村雨束帯鑑』は、浦島の世界に、松風村雨の物語と承和の変が、『浦島年代記』は眉輪王の変の話が結び付けられた作品であり、それらの出来事は劇中において、「日本」対「外敵」という対立の構図として組みこまれている。

以上の論文においては、浄瑠璃や『浦島年代記』を題材とした草双紙のみを対象としたため、その他の草双紙作品を含めた小説類への考察には

1) 「リメイクされ続ける浦島伝説『松風村雨束帯鑑』『浦島年代記』」長島弘明編『奇と妙の江戸文学事典』(文学通信、二〇一九年)所収、「近松の浦島物浄瑠璃の構想」『国語と国文学』98(2), 2021

至らなかった。本発表では、江戸時代における浦島伝説の近世的な変容について「日本」を意識した部分に焦点を当て考察する。

2. 浄瑠璃における浦島伝説

1) 古浄瑠璃

御伽草子の「浦島太郎」においては、「日本」という言葉が登場することはなかった。変化は古浄瑠璃から見られるようになる。『浦嶋太郎』(寛文頃)においては、龍宮では浦嶋太郎と玉より姫の故郷を「日本」と明確に称しているところに、御伽草子との大きな違いがあると見る。実際、その後の浄瑠璃では単に「故郷」ではなく、必ず「日本」としている。そのことからも後の浄瑠璃に与えた影響は大きいといえよう。

『浦嶋太郎』では、地上から龍宮に来た玉より姫に改名をさせたり、着ていた衣服を着替えさせたりもしていた。御伽草子の「浦島太郎」においても龍宮は異郷・異界として描かれていたが、さらに意識的に異域であることを表現したものといえる。

現在所在の明らかになっている浦島伝説を題材とした古浄瑠璃のうち、もっとも早いものと推定される本作品は龍宮が異界として地上世界と区別して描写され、浦島太郎と玉より姫の故郷を繰り返し龍宮側から「日本」と呼んでいることが確認できる。

『浦島大明神御本地』(元禄頃)は、序で本地垂迹が説かれ、浦島大明神の由来が語り始められるという形をとる。『浦島大明神御本地』では、『浦嶋太郎』同様、龍宮の人々は太郎の故郷を日本と捉えている。龍王は浦島に、火火出見尊(山幸彦)が兄海幸彦の釣り針を探すため綿津見神宮を訪れ、綿津見神の娘である豊玉姫と契り鸕鷀草葺不合尊が生まれたという話を

語って聞かせた。さらにそれ以降も龍尾を持つ御子が生まれたため宮中では裾を長く引くようになったとの故事を引用するなど、御伽草子の「浦島太郎」では言及されることがなかった龍宮と日本の皇室との深い縁について、新たに内容が付け加えられている。

この浄瑠璃が特徴的なのは、浦島太郎が仏教伝来に関わる人物として設定されているところである[2)]。玉手箱を開けた浦島は実は島根の尊であり、一切経を日本にもたらし「神道仏道相比して王法を助け」るため浦島太郎となってあらわれたものと明かす。浦島太郎は浦島大明神として祀られるだけではなく、日本国の安泰のため仏教をもたらすという役割を担わされていた。

『伊勢外宮由来附浦嶋龍宮入』(成立未詳)には、雄略天皇の御宇に行われた、伊勢外宮の遷宮が取り入れられている。この浄瑠璃には、「日本」を誇りに思う浦島の姿が描かれる特徴がある。龍宮において夜叉と浦島が対決する場面で、梵天側の鉄仙鬼に浦島は捉えられ首を刎ねられそうになる。その時、浦島の胸板が光ると、五大尊明王が現れ、天地和合を説き、日本は「大日如来の本国なり、亦浦嶋が天王に被恐子細は、忝も懐中に天照大神座す故なり」と語る。浦島は伊勢外宮の遷宮の際、天照太神宮と書かれた札を守りにかけていたため、神力によって助けられたのであった。御伽草子では漁夫であった浦島が『伊勢外宮由来附浦嶋龍宮入』では武士として登場するだけでなく、不義を見逃すことを日本では恥と見なし、小国であっても日本の武士は勇敢であるとする「日本」に誇りを持つ人物とされている。

---

2) 林晃平『浦島伝説の研究』(おうふう、二〇〇一年)によると、臨川寺の略縁起(一七五六年)では弁財天を、観福寺略縁起(享保年間)では、観世音菩薩像を龍宮から持ち帰ったと記されており、浦島関連寺院の縁起には浦島太郎と仏教との関わりが見られる。

2) 近松の浄瑠璃

『松風村雨束帯鑑』では、『浦島大明神御本地』のように日本皇室と龍宮との縁について語られる場面が設けられている。

『浦島年代記』では、浦島は、鏡に映された七世の孫の受難と日本の困窮の状況を見て、大干魃による「日本帝王の愁い」に心を痛め、「日本のため子孫のため」帰りを急ぐ。「日本」が、龍宮から見た異界という意味をこめて用いられているだけでなく、浦島に、国のためにという意識のあらわれていることに注目される。信濃や丹後の国という限定された地域の話、あるいは一家の話ではなく、日本国に関わる話に変更されているのである。また、行平が浦島の子を御子の身代わりに立てるための口実として語ったものではあるが、応神天皇も龍尾があったことを語るなど[3]、近松は作中において龍宮と関わる日本皇室の故事を重ねて言及している。

近松は『松風村雨束帯鑑』において、謀反を企図する者を「他方海の悪龍」という外敵とすることで、その執念の激しさを表現した。『浦島年代記』の眉輪王が安康天皇の首を捧げるという第六天は、欲界六天の最高第六位に位する天で、他化自在天ともいう。その主は第六天魔王（魔王、魔羅、摩醯首羅）といわれ、仏道を妨げる存在である。近松は、眉輪王による安康天皇の弑逆を、大草香の臣の生まれ変わりで、魔に魅入られた眉輪王という異形のものの所業とした。その過程で、大草香の臣の復讐の対象は、個人から、日本だけでなく三国へと次元が変わっている。結局、眉輪王は雄略天王や浦島らに討たれるが、この眉輪王の最期は、『松風村雨束帯鑑』同

---

3) 応神天皇の龍尾に関する記述は、『古事記』や『日本書紀』には見られず、俗語の起源、寺社の縁起、故事・故実などを解説した『塵添壒嚢鈔』(一五三二年)に、「尾籠」の語源の説明として見られる。（「応神天皇。海神ノ御末ナル故ニ。龍尾御座メ。是ヲ隠サン為ニ装束裾ト云者ヲ作リ始テ是ヲ引キ彼ノ尾ヲ令隠給ケル也。」）

様、神力（雄略天皇の「神力応護の弓矢」）による「朝敵外道」退治であったという設定になっている。

近松の浄瑠璃における、悪側としての外敵・外道―魔王の設定は、中世の文献に第六天、摩醯首羅と呼ばれた魔王が、日本を脅かす存在として登場していたことと通じるものがある。近松は、承和の変に関係し廃太子された恒貞親王や、父大草香皇子を誅殺した安康天皇を刺殺した眉輪王を、天下擾乱を企図する他方海の悪龍や外道の魔王として描いた。特に『浦島年代記』においてはそのような悪の設定により、個人的な欲望による専横や悪逆ではなく、超人的なものとしてスケールの大きい対立としたところに特徴があるといえよう。

3. 小説における浦島伝説

浦島伝説を素材とした草双紙は明和期に刊行が集中しており、そのうち、近松の『浦島年代記』を題材とした青本や黒本も刊行された。数多い草双紙の浦島物のうち、「日本」を意識的に用いた作品は少ない。浦島伝説を題材とした黄表紙『十六嶋千代之碑』は、浦島が龍宮に訪れる際に岩上に「日本人来る」という謎の文字が現れるなど、浦島を「日本人」と意識した表現が登場する作品として注目される。この作品は、読本『龍都朧夜語』（明和七年）を典拠としており、構想や文章まで同じように取り入れている。ここでは、典拠である『龍都朧夜語』を考察する。

読本『龍都朧夜語』は、浦島伝説に海底や龍宮と関わる話である、猿の生き肝・大職冠・俵藤太の話が結びついた展開を持つ。興味深い点は、近松の浄瑠璃を踏まえた草双紙の浦島物とは異なり、浦島を日本人と明言するなど「日本」が意識的に用いられていることである。

『龍都朧夜語』のあらすじは次のとおりである。まず、彦火火出見尊の龍

宮入りからはじまる。彦火火出見尊は豊玉姫と契るがその正体を知り日本へ帰ってしまう。豊玉姫が病に伏せたため、龍王の命により亀が彦火火出見尊の様子を窺いに日本に訪れるが、すでに日本では数百年が過ぎていた。亀はその釈明のため浦島を連れて龍宮に戻る。浦島は乙姫と契る。浦島が日本へ帰ると乙姫は病に伏す。その治療のため猿の生き肝をとりに亀が伊吹山へ向かう。亀は猿の生き肝を乙姫に差し上げたが、その後猿の息子は親の敵討ちを三上山の百足に頼む。巻四では、面向不背の玉取りの話に移る。一旦奪った珠を海人に奪われたことで鮫右衛門は龍王に叱られ恨みを抱き、鯨大海兵衛が暗主としている三上山の百足の味方になり、龍宮を攻め滅ぼし大王となる。そこへ藤原藤太秀郷が、瀬田の橋で大蛇（乙姫）に龍宮再興を頼まれたとして現れ、百足を打ち破り、龍王から褒美を得て日本へ帰国する。（浦島は龍王の太子を仙術で助ける）

彦火火出見尊の龍宮から地上へ帰ることは「日本へ帰り給ふ事」、亀右衛門が尊の様子を窺いに行くことも「日本へ向かふ」、そして浦島が龍宮から帰る際もやはり「日本へ帰る」と表現される。彦火火出見尊と豊玉姫の話も、浦島伝説も、「地上」あるいは「陸」、「故郷」として表現されていたが、ここではいずれも「日本」とされているのである。

御伽草子『浦島太郎』とは異なり、すでに御伽草子『俵藤太物語』では、地上は「日本」とされていた。百足退治をした藤太は龍宮に招かれるが、龍宮の「酒宴の儀式日本には様変りて」と述べたり、龍王は藤太に「日本国の宝に為し給へ」と褒美を与えている。俵藤太は、大蛇に百足退治を頼まれた際、「龍宮と和国とは金胎両部の国なれば、天照太神も本地を大日の尊像にかくし、垂跡を蒼海の龍神に現はし給へりと承り及ぶ時は、異議に及ぶまじ。」[4]として引き受けていた。

新大系『室町物語集』下『俵藤太物語』の田嶋一夫の校注によると、「龍宮

4)「俵藤太物語」『新古典文学大系　室町物語集下』岩波書店、p.93.

と和国とは金胎両部の国」というのは、「密教では、宇宙のすべては大日如来のあらわれで金剛界と胎蔵界という二つの世界像によって構成されており、龍宮と日本がそれぞれ金剛界と胎蔵界をあらわすもので、両者一つとなって完全な仏国土になるという本地説を言う」とされる[5)]。『太平記』にも同様な記述が見られる。『俵藤太物語』では、天照大神と龍神は胎蔵界の大日と金剛界の大日の垂迹身であって、本地身は同じということから、俵藤太が百足退治を引き受けているのである。

読本『龍都朧夜語』では、百足は藤原秀郷に責められ敗色が濃くなると、魔術・幻術を行い抵抗するが、ついに藤原秀郷が「南無八幡大菩薩」と祈念しつつ放った矢に討たれ滅びる。藤原秀郷が登場するのは巻四で、乙姫が瀬田の橋にあらわれ「神国応護の威勢をかり人力にあらずんば再び龍宮の栄へ覚束なしと」思い、藤原秀郷に龍宮再興への助力を願っていた。乙姫は龍宮の再興は「神国応護」の威勢を借りた人力によって果たせるものと捉えており、藤原秀郷も最終的には「南無八幡大菩薩」を祈念し神の力で百足を討っていた。結局、読本『龍都朧夜語』において龍宮の再興は、神国日本の藤原秀郷によって果たされたものとなっているのである。

4. おわりに

御伽草子『俵藤太物語』に見られるように、中世には、龍宮からみた地上は「日本」として捉えられていた。両部神道的な考え方、また、日本は「大日如来」の本国であるという考え方が、浄瑠璃の浦島ものの「日本」を意識した構想のもとにあったものとも思われる。近世文芸の浦島ものにおける「日本」の登場は、地上あるいは龍宮の秩序を脅かす存在との対立・解消（平定）を描き出す上で、効果的であったといえるだろう。

---

5) 上掲書、p.93.